

# 平成30年産水稻の生育状況と今後の対策 (水稻生育診断技術確立調査-5号)

農林総合研究センター  
平成30年6月22日調査

## 気象経過

<平年対比>

### 【平均気温】

- ・ 6月第3半旬は、金沢、輪島ともかなり低い（平年差：金沢-2.2℃、輪島-2.0℃）
- ・ 6月第4半旬は、金沢は並、輪島は低い（平年差：金沢-0.1℃、輪島-0.9℃）

### 【日照時間】

- ・ 6月第3半旬は、金沢、輪島ともかなり少ない（平年比：金沢 63%、輪島 35%）
- ・ 6月第4半旬は、金沢は多く、輪島はかなり多い（平年比：金沢 123%、輪島 125%）

### 【降水量】

- ・ 6月第3半旬は、金沢は並、輪島はかなり多い（平年比：金沢 77%、輪島 208%）
- ・ 6月第4半旬は、金沢、輪島ともに並（平年比：金沢 76%、輪島 116%）

### 【1ヶ月予報】

6月21日発表の1か月予報（6月22日～7月22日）では、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、高い確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

## 生育概況等

### 【本田の生育】

#### 1. 出穂期（早生品種）

県内の生育観測田における早生品種ゆめみづほで幼穂が確認されており(0.2～1mm程度)、ゆめみづほの出穂期は加賀地域で7月19～21日頃と近年および前年より1日遅く、能登地域(羽咋～中能登)では7月23日頃と近年並で、前年より3～4日遅くなると思われる。

また、能登地域(奥能登～珠洲)の能登ひかりの出穂期は、7月27日頃と予想され、近年より5日、前年より1～2日程度遅くなると思われる。

#### 2. 草丈

コシヒカリは平年比91%（加賀地域91%、能登地域91%）とやや短い。

ゆめみづほは近年比93%（加賀地域94%、能登地域89%）と加賀地域でやや短く、能登地域で短い。

ひやくまん穀は前年比114%（加賀地域108%、能登地域122%）と加賀地域でやや長く、能登地域で長い。

但し、葉齢展開から、いずれの品種も草丈は平年並と考えられる。

#### 3. m<sup>2</sup>当たり茎数

早生品種、中生は茎数の増加が緩やかとなっており、最高分けつ期を迎えていると思われ、前年並である。

コシヒカリは、平年比95%（加賀地域92%、能登地域101%）と加賀地域では平年並で前年より少なく、能登地域では平年及び前年並である。

ゆめみづほは、近年比97%（加賀地域96%、能登地域98%）と近年並で前年よりやや少ない。

ひやくまん穀は加賀地域では441本/m<sup>2</sup>(前年比84%)、能登地域では383本/m<sup>2</sup>(前年比168%)と、葉齢展開に合った適正な茎数となっている。

### ㎡当たり茎数（平年、前年）及び株当たり茎数

コシヒカリ	県平均	501本	（平年比 95%	前年比 98%	）	27.5	本/株
	加賀	494本	（平年比 92%	前年比 86%	）	27.3	本/株
	能登	511本	（平年比 99%	前年比 98%	）	27.7	本/株
ゆめみづほ	県平均	549本	（平年比 97%	前年比 88%	）	29.7	本/株
	加賀	563本	（平年比 96%	前年比 89%	）	31.4	本/株
	能登	519本	（平年比 98%	前年比 87%	）	26.4	本/株
ひやくまん穀	県平均	412本	（平年比 —	前年比 109%	）	23.3	本/株
	加賀	441本	（平年比 —	前年比 84%	）	26.2	本/株
	能登	383本	（平年比 —	前年比 168%	）	20.7	本/株

#### 4. 葉齢

コシヒカリは県平均-0.2葉（県平均98%、加賀-0.1葉、能登-0.3葉）となっており、葉齢展開からみた生育の遅速は、平年に比べて1～2日程度遅いと見込まれる。

ひやくまん穀は県平均+0.7葉（県平均108%、加賀+0.1葉、能登+1.3葉）となっており、葉齢展開からみた生育の遅速は、加賀地域では前年より1日程度遅く、能登地域では11日程度早いと見込まれる。

#### 【病害虫の発生状況】

いもち病は平年に比べ1日早く初発が確認されている。管内の圃場巡回を徹底し、葉いもちの発生が認められた場合は直ちに防除する。

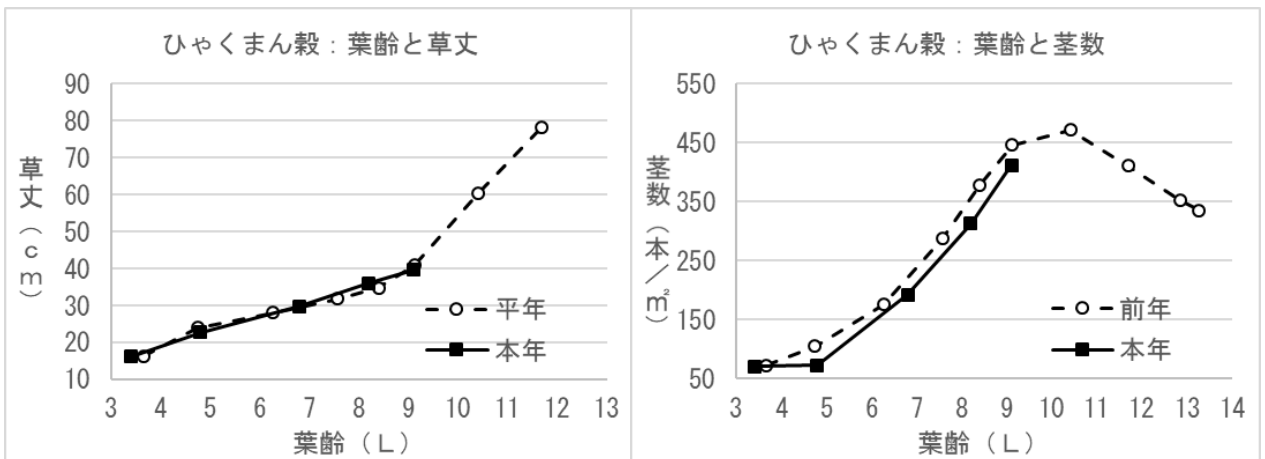
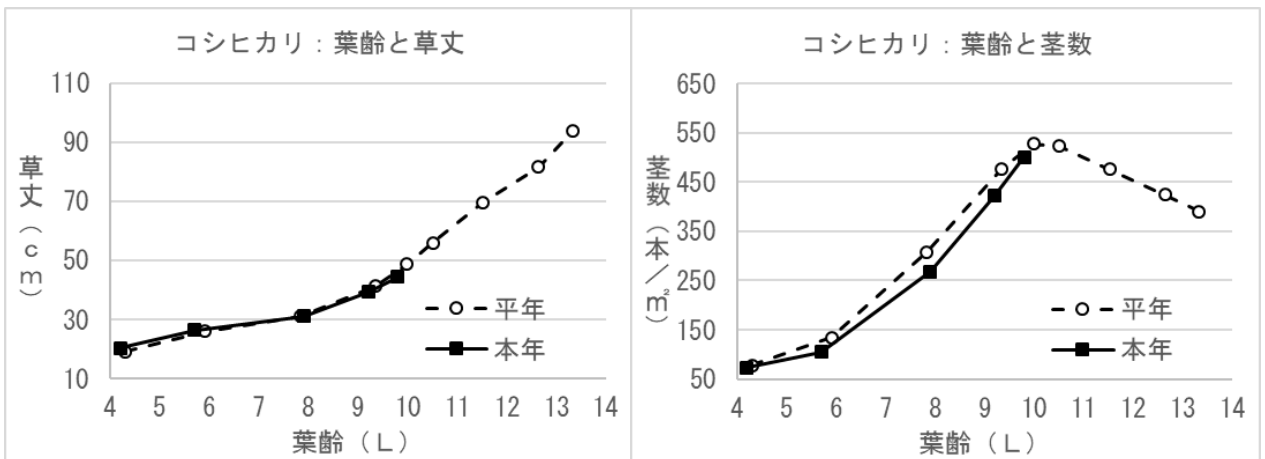
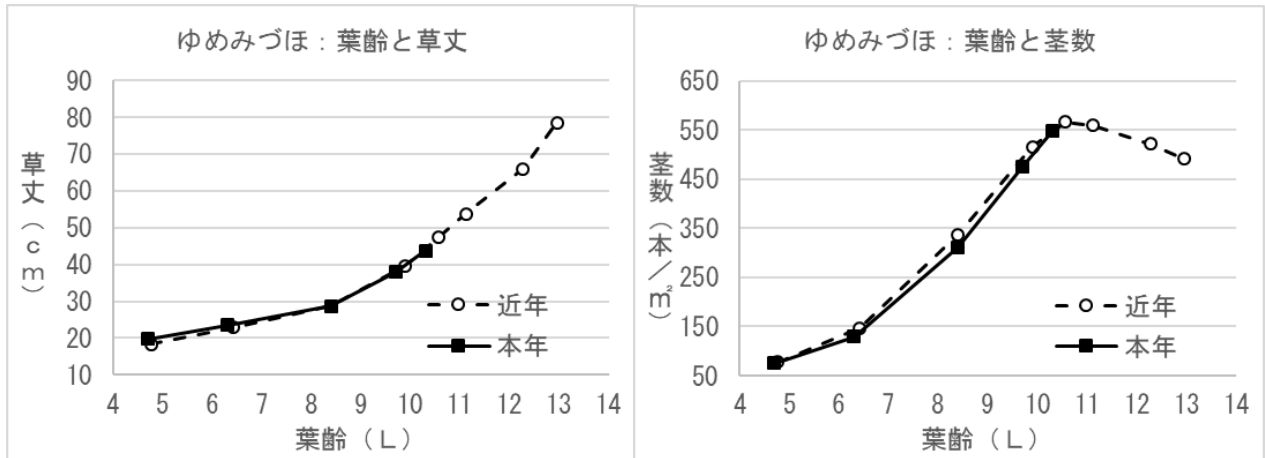
【病害虫情報－ 2 いもち病の初確認について（平成30年6月20日付）参照】  
雑草地におけるカメムシ類の発生は平年に比べ多いと予想されており、特に飛翔性カメムシ類が多い。

#### 当面の対策

1. 早生は幼穂形成期に入っているため、中干しを終了し、以後、間断通水による飽水管理とし、根の機能低下防止に努める。
2. 早生の1回目の穂肥は、適期の幼穂長（ゆめみづほ：1～2mm出穂23日前、能登ひかり：2～3mm出穂20日前）を確認し、遅れずに施用する。ただし、茎数が多く、葉色が濃いほ場（葉色板4.0を超えるほ場）では、1回目の穂肥を減量して施用し、2回目は出穂7～10日前に基準量を施用する。
3. コシヒカリは、稲体の健全化、弱勢分けつの発生抑制と有効茎歩合の向上を図るため **中干しを継続し**、特に、分施肥系のほ場では、中干しをしっかりと行い穂肥を施用できる稲体へ誘導する。
4. **高地力田や生育過剰なほ場では、強めの中干し**を行い、適正籾数への誘導を図る。
5. 幼穂形成期（**出穂前25～15日**）に**18℃未満の最低気温**が予想される場合は、水深10cm以上の深水管理とし、不稔籾の発生防止に努める。  
○主な早生品種の**耐冷性**：**五百万石（弱）、ゆめみづほ（中）、能登ひかり（中）、ほほほの穂（中）、石川門（強）**
6. いもち病の箱施薬が行われていないほ場、いもち病の常発地および葉色の濃いほ場を中心に巡回を行ない、葉いもちの早期発見に努め、発生を認めたら直ちに防除を行う。
7. 紋枯病の常発地、前年発生ほ場及びゆめみづほ作付ほ場では、発生に注意し、防除を徹底する。粉剤での防除は、出穂前10～14日が適期である。
8. 斑点米カメムシ類の生息密度を下げるため、引き続き7月上旬まで畦畔や農道の除草を徹底する。除草は、集落など地域全体で一斉に実施すると密度低下の効果が高い。なお、刈り払った雑草は用排水路に入らないように注意する。

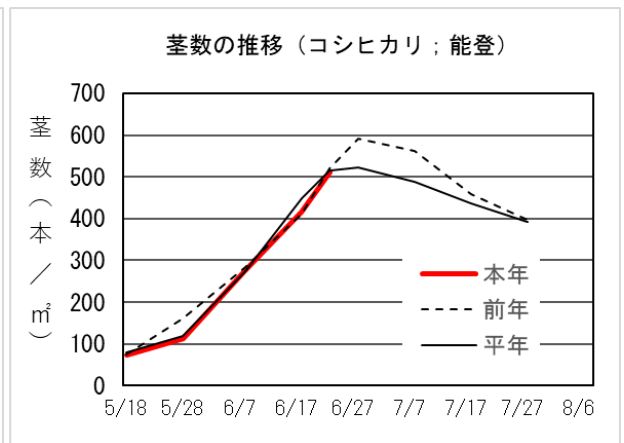
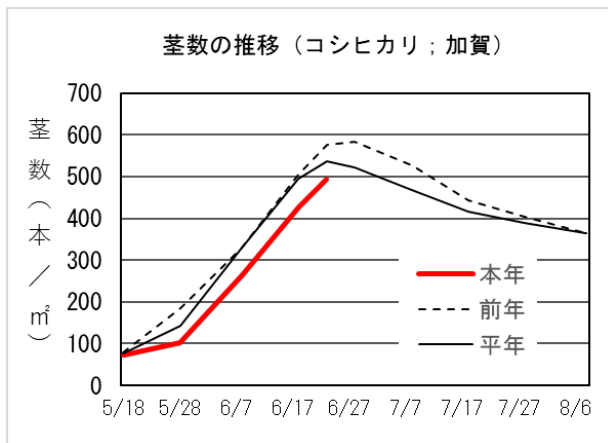
<参考：草丈の伸長および茎数の増加傾向>

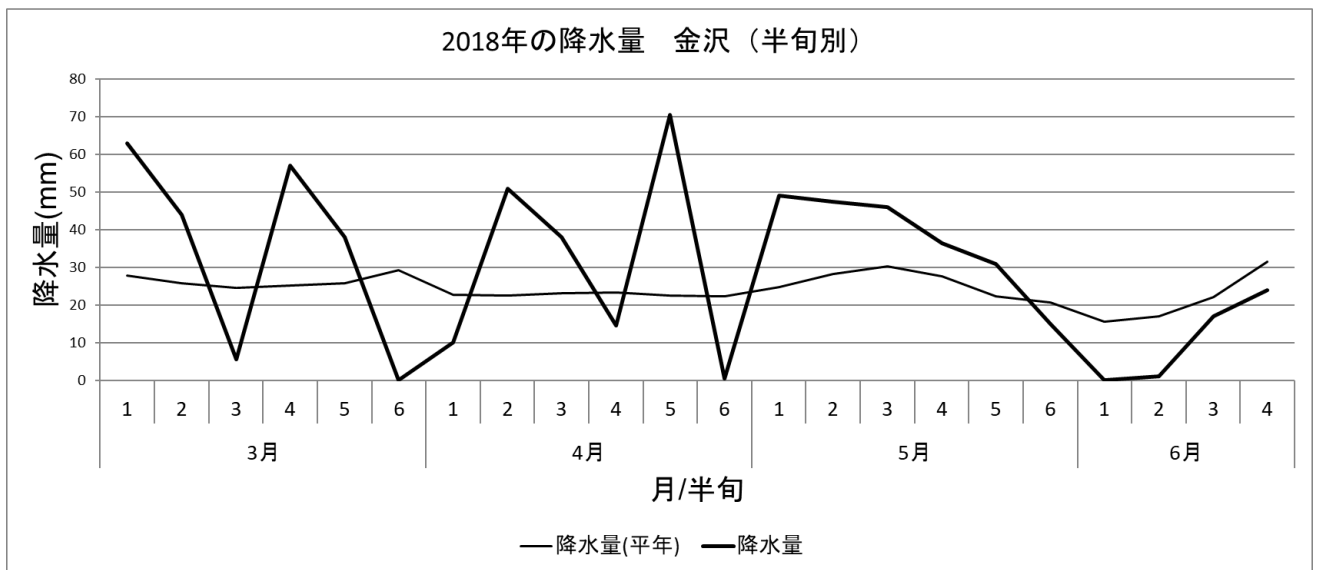
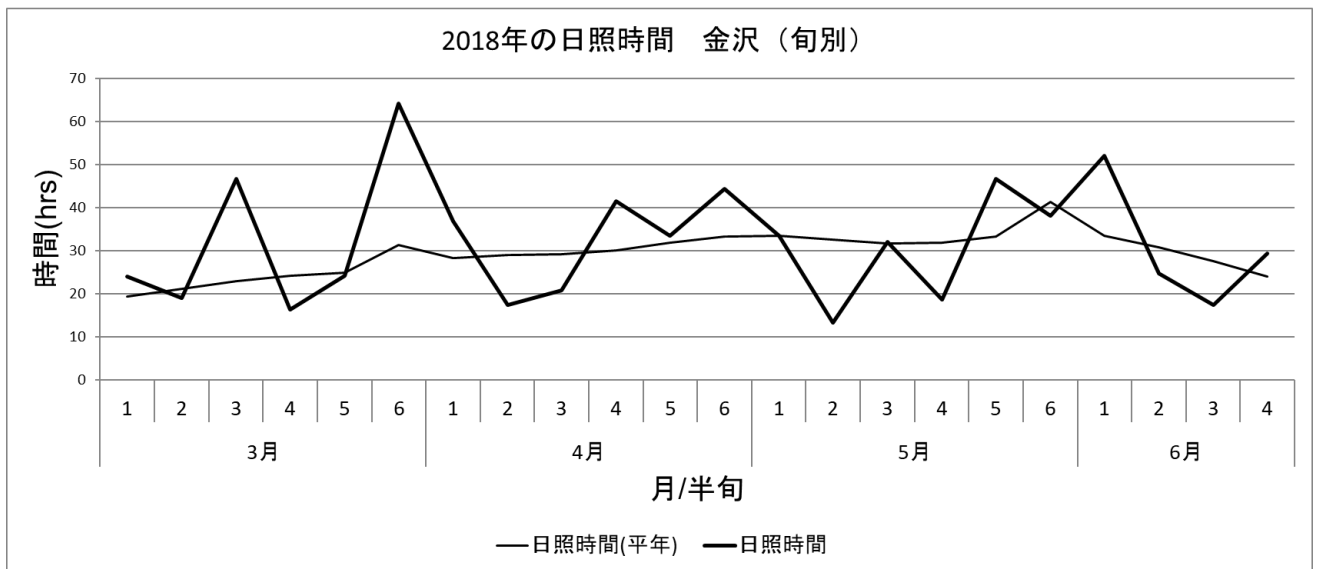
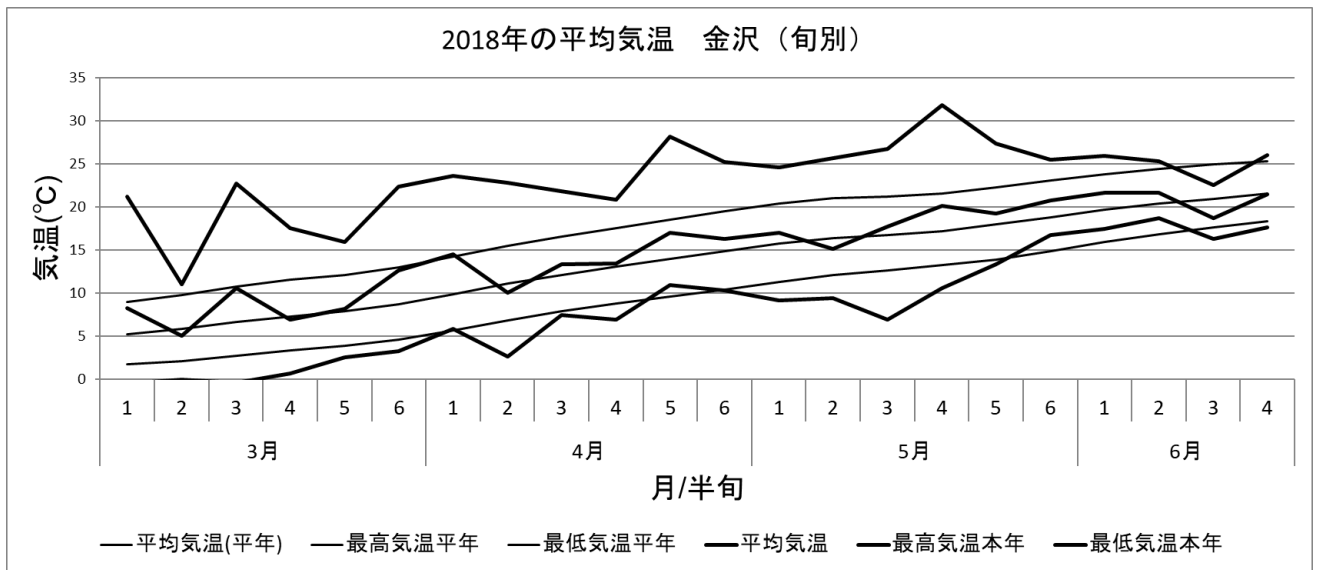
- ・ 葉齢を基に草丈の伸長および茎数の増加を平年と比較すると、コシヒカリは草丈及び茎数は平年並、ゆめみづほは草丈および茎数は近年並、ひやくまん穀の草丈は前年並、茎数は前年よりやや少なくなっている。



- ・ また、調査日を基にコシヒカリの茎数増加を平年及び前年と比較すると、加賀地域は

平年及び前年より少なく、能登地域は平年および前年並みとなっている。  
 また、最高分けつ期については、平年よりやや遅く前年並になると見込まれる。





気象経過イメージ（金沢气象台）

